

201001009A

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）

新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの  
現状と連携に関する包括的調査研究

平成 22 年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 田 林 暁 一

（東北大学）

平成 23（2011）年 3 月

# 新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究

## 主任研究者

田林 暁一 東北大学 名誉教授

## 分担研究者

兼松 隆之 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科消化器外科学 教授

富永 隆治 九州大学大学院医学研究院循環器外科学 教授

前原 正明 防衛医科大学校心臓血管外科学 教授

伊藤 雅治 社団法人全国社会保険協会連合会 理事長

遠藤 久夫 学習院大学医療経済学 教授

西田 博 東京女子医科大学心臓血管外科学 講師

## 目 次

I. 総括研究報告書	1
	田林 暁一
II. 分担研究報告書	
新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究	6
	兼松 隆之
新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究	8
	富永 隆治
新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究	16
	前原 正明
新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究	18
	伊藤 雅治
新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究	25
	遠藤 久夫
新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究	43
	西田 博
III. 研究成果の刊行に関する一覧表	49
IV. 研究成果の刊行物・別冊	51

## 新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究

主任研究者 田林暁一 東北大学

### 研究要旨

今年度施行した主な研究は、1) 英国のフィジシャンアシスタント(PA)養成の現状視察、国際 PA 教育者学会出席、2) 若手外科医へのナースプラクティショナー(NP)・PA 制度に関する意識調査、3) 我が国のチーム医療のあり方に関する討論会である。

英国訪問では、PA 養成の背景、学習・教育内容等について視察したが、養成課程が医師主導で行われていることが大きな特徴であった。国際 PA 教育者学会には、種々の国からの参加があり、日本からは初めての参加と思われるが、すでに学会として教育者を如何にして育成するかという時代になってきている事を自覚する必要があると思われた。

若手外科医への意識調査では、NP・PA に関する知識が乏しい面はあったが、協働する事に対しては賛同する意見が多く、これまでと異なる医療体系の構築に前向きな考えが多かった。

我が国のチーム医療のあり方に関する討論会では、医師、看護師、非医療関係者の方々に集まって頂き、チーム医療のあり方、特定看護師について、特定看護師の業務内容等について意見交換を行った。特定看護師に賛同する意見としては、今後の日本人の年齢別構成の変化から必要であろうとする考えが多く、反対する意見としては、現存する職種を活用することで十分対応できるという考えがあった。印象に残ったのは、医療の中心であるべき患者を置き去りにした流れが見られ、各種団体の縄張り争いになっているのではないかという意見であった。

## A. 研究目的

英国のチーム医療の現状調査と、国際PA教育者学会参加による、特にPA養成の基本的な教育体制を学び、我が国におけるNP・PA養成の基礎とする事と、若手外科医に対する意識調査と種々の立場の人との意見交換を行い、NP・PA養成の問題点を探る事である。

## B. 研究方法

- a. 英国バーミンガム大学を、本班員の西田博、富永隆治、前原正明と、日本で修士課程を立ち上げる予定の藤田保健衛生大学の渡邊孝、東北文化学園大学の遠藤雅人で訪問し、特にPAの教育システムを視察した。また、同メンバーで国際PA教育者学会に出席し、各国のPA教育者と意見交換を行った。
- b. 平成22年度外科専門医予備試験受験者1084名にNP・PAの新たな看護制度の導入に関する意識調査の用紙を配布して、アンケート調査を行った。
- c. 我が国のチーム医療のあり方に関する討論会  
秋山弘子東京大学高齢社会総合研究機構教授、海辺陽子NPO法人がんと共に生きる会副理事長、星北斗星総合病院理事長、草間朋子大分県立看護科学大学学長、坂本すが東京医療保健大学看護学科長、西田博東京女子医科大学心臓血管外科講師に出席頂き討論会を行った。尚、司会は、本研究班員の伊藤雅治全社連理事長と、遠藤久夫学習院大学教授にお願いし、1) チーム医療推進の背景、2) 「特定看護師」という新たな枠組みについて、3) 特定看護師の制度化の利点と問題点について討論を行った。尚、討論会は一般国民、報道関係者に公開する形式とした。

## C. 研究結果

- a. 英国視察  
平成20年-21年度の研究結果より、米国に

おけるナースプラクティショナー(NP)、及びフィジシャンアシスタント(PA)の応募条件、修士課程での学習及び実習内容、資格取得後の仕事内容、給料、一般看護師及び医師との関係、医行為を施行する際の医師の指示内容、NP・PAの医行為の範囲の決め方等について、米国施設訪問を通して理解した。平成22年度では、さらに内容を深める目的と、PA養成が最近開始された英国施設視察と国際PA教育者学会への参加を行い、意見交換した。詳細は、分担研究者(西田博)報告に記載されているが、PA制度導入として、医師不足、労働時間の制限、高齢化、医療の高度化等の日本と同様の背景があることがわかった。英国における、PA制度導入に際しては、米国PAの試用が大いに貢献したことがわかり、日本では言語の問題で同様にはいかないが、日本人で渡米し、NP、またPAとして活躍されている方も増えてきているので今後活用していくのは一つの方策と思われる。教育体系は、米国とほぼ同様の体系であるが、医学教育を主とした内容の学習と実習からなり、卒業時点で初期研修医レベルの能力を備えさせる事が目標となっていた。国際PA教育者学会でも、教育に関する発表があったが、すでに開始されている日本での医師と看護師の中間職である特定看護師養成の大きな参考とすべきである。

- b. 外科専門医を目指している若手外科医へのNP・PA制度に関する意識調査  
平成22年度の外科専門医予備試験の受験者を対象としてNP・PAに関して意識調査を行った。  
NP・PAシステムについて未知の医師が多かったのは、欧米情報の衆知不足が大きく関与したと思われる。NP・PAが医師と協働する事について賛成する意見が多かったのは、若手外科医の過重労働、医療体制の変化等の要因でこれまでと異なる新しい医療体系の必要性を感じている結果と考えられた。NP・PAの手術参加については、条件付き参

加に同意する意見が多く、興味ある結果であった。

c. 我が国のチーム医療のあり方に関する討論会

討論会では、1) チーム医療推進の背景、2) 「特定看護師」という新たな枠組みについて、3) -1 特定看護師の制度化の利点と問題点について、3) -2 特定看護師が行うことができるようになる医行為の業務独占、について討論された。1) については、①医師及び看護師不足、高齢化社会の到来(2025-2030年問題)、医療の高度化、地域医療担い手不足等が背景で、このようなニーズを充足するには新たなイノベーションが必要である、②地域医療はチーム医療の観点からのみ解決する問題ではなく、国、政府等の再考も重要である、③チーム医療に関する議論では、受け手側(患者サイド)の視点が不在で、種々職種間の縄張り争いの感じがする等の意見があった。2) 第2の議論点である「特定看護師という新たな枠組み」を構築することについては、①看護師が医療的介入を行うことができるようになって、患者の利便性が高くなる、すぐに手を打てる、②高齢者は、複数の病気を持っている人が多いが、自宅に住み、望んでいるのは今までの生活をそのまま続けたいという人に対して支援する体制が必要である、③ミニドクター化を目指すのは問題である。厚労省は、このような体制を作ることで、患者さん達の不平不満の減少を目指しているのではないかと、④医師会代表の先生方は、思考停止状態で反対のための反対を言っているのではないかと。医師でなければできない高度なものと、もう少し簡単にできるようになった医療技術のすみ分けの時期が来ている。医療の安全性と、特定看護師構築案に矛盾はないのか等の意見があった。3) -1 第3の特定看護師の制度化の利点と問題点に関しては、①特定看護師に対しては患者の利便性向上、リスク管理的な予測と判断を期待し、それらを得る

にはこれまでと異なる教育が必要である、②特定看護師について考える前に現時点で施行されている認定看護師制度、6年間の教育を受ける薬剤師等の活用を先に考えるべきではないか、③患者を全人的に見る時に医学と看護の融合的な教育を受けた人が必要ではないか、④今後の高齢化社会において、特に慢性疾患のマネジメントのようなことはプロフェッションとして訓練を受けた人が良い。そのようなことをしていないと、これからの医療ニーズに対応できない、等の意見があった。3) -2 特定看護師が行うことができるようになる医行為の業務独占に関しては、①診療の補助行為を明らかに越えるような行為が特定の医行為で明確にする必要はある、②法制化していくべきであり、それは患者に対する責任である、③特定の医行為を制度化する意味と意義があるのか、④診療報酬上の加算で差をつける、等の意見があった。

4) 討論会のまとめ:特定看護師の必要性、及びあり方に関しては、今後さらに議論を深めていく必要があるだろう。議論の過程で最も大事だと思われたことは、患者側の理解・納得であり、制度設計を急ぐあまり、患者側の思いが忘れられている感じがおり、常に患者中心の医療を良くしていくという基本方針の遺漏がないようにすることが重要と思われた。

D. 考察および結論

a. 新しい医療体制の模索

世界各国で現状の医療体制に問題を抱えており、この背景には、高齢化社会の到来、人口増加、国民の多くが高度な医療を求めてきていることがある。それらに十分に対応するには、これまでの医師と看護師を中心とした医療体制を変えなくてはならないという動きがあり、英国でPAシステムを導入したのもその一環と考えられる。新しい職種として考えられているNP・PAは、医師とその他の医療関係職種の間にある狭間を埋める働きを有していると期待さ

れている。その育成に当たっては教育が重要であるということは一致した意見であり、かつ教育は医師主導で施行されるべきとされている。国際的に教育者が一同に会する学会もあり、今後日本で教育に携わる予定の方々には積極的に参加し、その方面で経験豊かな方々から学んでいく事が今後必要と考えられている。

- b. 新しい医療体制に対する若手外科医の考え  
若手外科医が欧米で長い歴史を有する NP・PA 制度について熟知していない事については、予期しなかったことである。ただ、そのような職種を有する人との協働には前向きの意見が多くみられ、この背景には若手外科医の過重労働と関連性があると思われる。ただ、NP・PA を目指す人は、医師の下働きの内容的業務を請け負う事には反対意見が多く、今後若手外科医に対する説明の必要があると考える。業務的には、医師の指示は必要であるが、NP・PA と医師の間には相互の独立性、尊重、理解を重んじるという関係性があるという事を忘れてはならないと考える。
- c. 我が国のチーム医療のあり方  
種々の切り口からの意見があったが、NP・PA システムを推進していこうと考えているの方々にとって、これまでの議論が患者サイドの意見を置き去りにしてきたのではないか、また各職種間の縄張り争い的な議論になっているのではないかという意見は反省を要する点であったと思われる。言われてみると、成程と思われる節もあり、医療の原点である「患者中心の医療」をどのように良くするかという観点からの議論は重要と思われる。NP・PA のような新しい職種の必要性に関しては、まだ意見の一致はないが、今後の方向性としては、動きながら合意点を模索するという方向性があるように思われる。米国でも、NP・PA 制度が確立するまで約 40 年を要しており、

今後、種々のデータを集約して長いスパンでの評価を行っていく体制の構築が重要と考える。

#### E. 健康危険情報

特になし。

#### F. 研究発表

##### 1. 論文発表

- ①前原正明、西田 博、渡邊 孝、富永隆治、田林暁一：外科領域におけるコメディカルとの役割分担—現況と未来 2. 医師の立場から。日本外科学会雑誌 111(4)：209-215, 2010.
- ②西田 博、里見 進、遠藤久夫、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、伊藤雅治、宮崎 勝、金子公一、白井良夫、土屋了介、永野浩昭、星野 健、矢永勝彦：外科医療におけるコメディカル診療参加の意義に関する考察—日本外科学会外科医週間タイムスタディによる外科医業務解析結果から—。日本外科学会雑誌 111(4)：251-257, 2010.
- ③田林暁一、西田 博、前原正明、富永隆治：病院における外科の課題。日本外科学会雑誌 111(5)：320-322, 2010.
- ④田林暁一、門間典子、西田 博、前原正明、富永隆治：周術期管理における看護師の業務拡大に関する意識調査。日本外科学会雑誌 111(6) 384-386, 2010
- ⑤西田 博、田林暁一、富永隆治、前原正明、渡邊 孝、遠藤雅人：英国における PA 教育の視察と国際 PA 教育者学会に参加して—非医師診療師・中間職種の教育のあり方を考える—。日本外科学会雑誌 112(1)：47-54, 2011
- ⑥兼松隆之、田林暁一、富永隆治、西田 博、伊藤雅治、前原正明、遠藤久夫：看護師の業務拡大に対する外科専門医を目指す若手外科医の意識調査。日本外科学会雑誌 112:2011 に掲載予定

## 2. 学会発表

- ①西田 博、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、遠藤久夫、伊藤雅治：チーム医療維新：米国型 NP/PA から“Japan Original”へ。第 110 回日本外科学会、名古屋、2010 年 4 月 10 日。
- ②富永隆治、島本光臣、西田 博、前原正明、田林暁一：若い胸部外科医の労働時間・環境に関する提言。第 63 回日本胸部外科学会定期学術集会、大阪、2010 年 10 月 25 日。
- ③西田 博、田林暁一、富永隆治、前原正明、渡邊 孝、遠藤雅人：“自律自助”：新戦力“周術期管理師”の導入実現に向けて。第 63 回日本胸部外科学会定期学術集会、大阪、2010 年 10 月 25 日。

- ④西田 博、前原正明、富永隆治、渡邊 孝、田林暁一：“特定看護師”モデル事業実施へー 職能・職域の見直しを伴うチーム医療推進が病院医療に与えるインパクト チーム医療維新全体最適に向けて“半歩前進”から“1 歩前進”へ 日本医療・病院管理学会第 285 回例会、東京、2010 年。

## G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得  
特になし
2. 実用新案登録
3. その他



## 新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究

分担研究者 兼松隆之 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 移植・消化器外科

研究要旨 外科の労働環境の悪化が懸念されている。その解決策の一つとして、nurse practitioner (NP)や physician assistant (PA)などの新しい看護師制度の導入を望む声も少なくない。しかし、これらの看護師が手術の補助に回ると、外科専門医資格取得や更新を目指す外科医の手術経験の場を奪うことにもなりかねない。そこで新制度の導入にあたっては両制度の並立が望まれるところである。

本研究は、上記の事情から、外科専門医試験受験者の若手外科医に対し、看護師業務の拡大に対する意識調査を実施した。

その結果、若手外科医にはNPやPAについての認知度は低かった。ただし、そのような制度の導入については、賛成する者が約80%と多くを占めた。その役割としては、手術での第2、3助手を務めるものを希望するのが大半であった。すなわち、外科専門医資格の取得を目指す若手外科医には、看護師の業務拡大に関してネガティブに捕らえる傾向はなかった。

### A. 研究目的

NPやPAなどの新しい看護師制度の導入について、外科専門医資格を目指している若手外科医の意識調査を行った。NPやPAの業務の一環として、手術の補助的な役割を担うことも考えられる。そのことは若手外科医が経験すべき手術症例の場を少なくすることも一面では危惧される。そのような境遇になりかねない若手外科医にとって、看護師の業務拡大についてどのように考えるのか、を明らかにする目的とした調査である。

### B. 研究方法

日本外科学会と日本外科学会専門医制度委員会の協力を得て、平成22年度外科専門医試験受験者を対象として、アンケート調査を行った。

### C. 研究結果

その結果、NPやPAといった職種に対する認知度は低く、「よく知っている」との回答は14%にすぎなかった。そうであっても、これらの看護師の業務拡大については賛成する者が約60%、反対は8%で、全般的にその導入は望まれている傾向にあった。

ついで、NPやPAが医師の監視の下で医療行為を行うことには、無条件での賛成は約20%、条件つきで賛成は約60%で、反対は6%にあった。また、条件付き賛成での条件とは、手術の第2、3助手を務めることとするものが圧倒的に多かった。

#### D. 考察

外科専門医受験者の比較的若手外科医には NP や PA のなどの業種に関する認知度は低かった。ただし、そのような制度の導入があれば、その実現を望む傾向は顕著であった。このことは、現在の外科医療の現場では外科医不足や若手外科医への雑務の負担などにより、現状からの回避の希望が強いことが窺われた。また、これらの業種に対しては、ある程度の高い教育が施されるならば、医師の監視下での医療業務への関与も容認する傾向があった。その一つは、手術での第 2, 3 助手としての参加であった。このことは若手外科医が看護師の業務拡大によって、専門医資格取得のための手術経験の場を奪われかねないが、それ事への懸念は少なく、それよりも現状の外科医療現場の環境の劣悪さの改善を求めていることを示しているのではないかと推察された。

#### E. 結論

外科専門医試験受験者に対する新しい看護師業務の拡大に関するアンケート調査の結果、NP や PA に対する認知度は低いものの、これらの新制度の導入についてはネガティブな側面を少ないと考えられた。

#### F. 健康危険情報

なし。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

- ①. 兼松隆之：英国の医療事情の一側面と専門医制度の仕組み. 日本癌病態治療研究会誌 16 (1) : 38-40, 2010.
- ②. 西田 博、里見 進、遠藤久夫、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、伊藤雅治、宮崎 勝、金子公一、白井良夫、土屋了介、永野浩昭、星野 健、矢永勝彦：外科医療におけるコメディカル診療参加の意義に関する考察—日本外科学会外科医週間タイムスタディによる外科医業務解析結果から—。日本外科学会雑誌 111(4) : 251-257, 2010.
- ③. 兼松隆之、田林暁一、富永隆治、西田博、伊藤雅治、前原正明、遠藤久夫：看護師の業務拡大に対する外科専門医を目指す若手外科医の意識調査 日本外科学会雑誌 (受理済)

##### 2. 学会発表

- ①. 宇賀達也、江口晋、兼松隆之：外科の魅力伝えるためには、何が必要か？～当科での現状～。第 110 回日本外科学会定期学術集会、名古屋、04.08-10、2010.
- ②. 西田 博、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、遠藤久夫、伊藤雅治：チーム医療維新：米国型 NP/PA から“Japan Original”へ。第 110 回日本外科学会、名古屋、2010 年 4 月 10 日.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

なし

## 新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究

分担研究者 富永隆治 九州大学大学院医学研究院循環器外科

研究要旨： 医療崩壊の一因は現場の医師の過重労働にある。医業の分業化は医師の負担を軽減し医療崩壊を防止する有効な方策と考えられる。しかしながら、一方では医療の質の低下を招来し、医師の既得権を侵害するという意見もある。日本医師会執行部は公式見解として医師と看護師の中間に位置する職種の創設に反対を表明した。本研究では、日本医師会執行部と現場での個々の日本医師会員の意見の一致率を検討するために、すべての日本医師会員を対象に医業の分業化に対する意識調査を企画した。全国医師の縮図として都市と農漁村が混在する福岡県医師会を選択した。

### A. 研究目的

医業の分業化に対する日本医師会員の意識調査を行う。

### B. 研究方法

(1) 日本医師会会員の代表として福岡県医師会会員を対象とした。福岡県は人口約500万人、都市と農漁村部が適当に混在し、日本全体の縮図として妥当と考えられたからである。

(2) 日本医師会および福岡県医師会の賛同を得て、福岡県医師会員7700人を地区別、会員区分(A会員、B会員)に分け、それぞれの半数(3850人)にアンケートを送付した。

(3) 資料に送付したアンケートを添付した。

### C. 結果

アンケート結果が出てから分析考察する。

### D. 研究発表

#### 1. 論文発表

①前原正明、西田 博、渡邊 孝、富永隆治、

田林暁一：外科領域におけるコメディカルとの役割分担—現況と未来 2. 医師の立場から. 日本外科学会雑誌 111(4) : 209-215, 2010.

②西田 博、里見 進、遠藤久夫、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、伊藤雅治、宮崎 勝、金子公一、白井良夫、土屋了介、永野浩昭、星野 健、矢永勝彦：外科医療におけるコメディカル診療参加の意義に関する考察—日本外科学会外科医週間タイムスタディによる外科医業務解析結果から—。日本外科学会雑誌 111(4) : 251-257, 2010.

③田林暁一、西田 博、前原正明、富永隆治：病院における外科の課題. 日本外科学会雑誌 111(5) : 320-322, 2010.

④田林暁一、門間典子、西田 博、前原正明、富永隆治：周術期管理における看護師の業務拡大に関する意識調査. 日本外科学会雑誌 111(6) 384-386, 2010

⑤西田 博、田林暁一、富永隆治、前原正明、渡邊 孝、遠藤雅人：英国におけるPA教育の視察と国際PA教育者学会に参加して—非

医師診療師・中間職種の教育のあり方を考える一. 日本外科学会雑誌 112(1):47-54, 2011

- ⑥兼松隆之、田林暁一、富永隆治、西田 博、伊藤雅治、前原正明、遠藤久夫：看護師の業務拡大に対する外科専門医を目指す若手外科医の意識調査. 日本外科学会雑誌 112:2011 に掲載予定

## 2. 学会発表

- ①西田 博、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、遠藤久夫、伊藤雅治：チーム医療維新：米国型 NP/PA から “Japan Original” へ. 第 110 回日本外科学会、名古屋、2010 年 4 月 10 日.
- ②富永隆治、島本光臣、西田 博、前原正明、田林暁一：若い胸部外科医の労働時間・環境に関する提言. 第 63 回日本胸部外科学会定期学術集会、大阪、2010 年 10 月 25 日.
- ③西田 博、田林暁一、富永隆治、前原正明、渡邊 孝、遠藤雅人：“自律自助”：新戦力“周術期管理師”の導入実現に向けて. 第 63 回日本胸部外科学会定期学術集会、大阪、2010 年 10 月 25 日.
- ④西田 博、前原正明、富永隆治、渡邊 孝、田林暁一：“特定看護師”モデル事業実施へ — 職能・職域の見直しを伴うチーム医療推進が病院医療に与えるインパクト チーム医療維新全体最適に向けて“半歩前進”から“1 歩前進”へ 日本医療・病院管理学会第 285 回例会、東京、2010 年.

資料:

## 福岡県日本医師会会員を対象とした「医療の分業化」に関するアンケート

国民皆保険という優れた医療制度のもと、日本国民はいかなる時でも最高の医療を、安い自己負担で利用することができ、世界有数の長寿と健康的な生活を享受してきました。一方、日本の医療制度を支えてきた医師の献身的ともいえる過重労働は、聖職という美名の下、長く看過されてきました。近年問題となっている医療崩壊は、まさにこの医師の過剰な肉体的・精神的負担が原因であります。これを是正するため、医師と看護師の中間の職種(Nurse practitioner:NP, Physician assistant:PAあるいは特定診療師(仮称))を新たに設け、医師の業務の一部を肩代わりしてもらうという医療の分業化が議論されています。米国では以前より、この職種は広く認知され、医師の監督下、幅広く診療活動を行っています。医療の分業化が医師の負担を軽減することは間違い無いところですが、一方では、部分的にはせよ、医師以外の職種に、本来医師のみが行ってきた診断、治療といった業務を移すことになり医療のレベルが下がり、医療の安全性が担保できないとする意見もあります。そこでわれわれは現場の先生方の意見を調査するために本アンケートを企画しました。お忙しい中まことに申し訳ございませんが、日本の医療を考える上で極めて重要な問題と考えますので、よろしくご回答いただきますようお願いいたします。なお今回のアンケートは福岡県医師会のご賛同を得て、福岡県に限定して施行されています。

「新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの現状と連携に関する包括的調査研究班(厚生労働科研)」

九州大学教授 富永隆治  
長崎大学教授 兼松隆之  
学習院大学教授 遠藤久夫  
防衛医科大学校教授 前原正明  
東京女子医科大学講師 西田 博  
全国社会保険協会連合会理事長 伊藤雅治  
東北厚生年金病院院長 田林暁一(班長)

### 本アンケートの目的

- 医師の過重労働を軽減するために医師と看護師の中間の職種(Nurse practitioner:NP、Physician assistant:PAあるいは特定診療師(仮称))を新たに設け、医師の業務の一部を肩代わりしてもらうという医療の分業化に対するご意見をお聞きするものです。
- 医療の分業化が医師の負担を軽減することは間違い無いところですが、一方では、医師以外の職種に、本来医師のみが行ってきた診断、治療といった業務を移すことになり医療のレベルが下がり、医療の安全性が担保できないとする見方もあります。現場の先生方のご意見をお聞かせください。

同封の返信用封筒にて **2週間以内**にご返送をお願いいたします。

問1. 本邦では医師と看護師の中間の職種(NP, PA あるいは特定診療師)は大学院の修士課程に相当する教育レベルが考えられていますが、NP, PA あるいは特定診療師 が医師の監視の下、医師と連絡を取りながら診療行為(診断と治療)をすることをどう思われますか。

- ① 無条件で賛成
- ② 条件付で賛成
- ③ 反対
- ④ どちらともいえない
- ⑤ その他( )

問2. 問1で無条件で賛成と答えられた方にお尋ねします。その理由を以下からお選びください。(複数選択可)

- ① 医師の過重労働が軽減される
- ② 医師としての仕事に専念できる
- ③ 優秀な看護師ならば仕事を一部任せてもいい
- ④ 患者にとって有用である
- ⑤ 医療費を安くできる
- ⑥ その他( )

問3. 問1で、条件付で賛成と答えられた方にお尋ねします。先生の「条件」を以下からお選びください。(複数選択可)

- ① 有能な中間職種(NP, PA あるいは特定診療師)が育成できること
- ② 医師との従属関係をはっきりさせる
- ③ 雇用条件をはっきりさせる
- ④ 医師の既得権を侵害しない
- ⑤ 仕事の範囲を限定させる
- ⑥ 医療の安全性が担保できる
- ⑦ その他( )

問4. 問3で、1)有能なNP, PA あるいは特定診療師が育成できることを選択された先生にお尋ねします。医師と看護師の中間の職種( NP, PA あるいは特定診療師 )資格認定試験に際し、必要とされる受験資格を以下からお選びください。

- ① 現在の看護師の資格があればよい
- ② 臨床工学士、薬剤師、歯科医、臨床検査技師の資格があればよい
- ③ 4年制の看護系大学卒業生
- ④ 4年制の看護系大学卒業生で修士課程(2年)修了者
- ⑤ 4年制の看護系大学卒業生で博士課程(4年)修了者
- ⑥ その他( )

問5. 問3で2) 医師との従属関係をはっきりさせる、および3) 雇用条件をはっきりさせるを選択された先生にお尋ねします。

わたくしたちは医師と看護師の中間職種には医師の包括的指示のもとでの医療行為が原則と考えています。ただし一部には米国のように NP は単独で開業できるとする意見もあります。先生のお考えをお聞かせ下さい。

- ① 単独で開業できる
- ② 医師と連携の下でのみ開業できる
- ③ 開業できない
- ④ どちらともいえない
- ⑤ その他( )

問6. 問3で6) 医療の安全性が担保できる、を選択された先生にお尋ねします。NP, PA あるいは特定診療師の受験資格に臨床経験が必要とお考えでしょうか

- ① はい
- ② いいえ
- ③ どちらでもいい
- ④ その他( )

問7. 問1で反対と答えられた方にお尋ねします。その理由を以下からお選びください。  
(複数選択可)

- ① 保助看法にある「診療の補助」の範囲を超え医師の職域を侵すから
- ② 医療の安全性が担保できないから
- ③ 責任の所在がはっきりしなくなるから
- ④ 今の看護師を見るといくら勉強しても、任せられるほど優秀な人はいないから
- ⑤ 普通の看護師が不足するから
- ⑥ 看護師の階層化につながるから
- ⑦ かえって看護師の業務を限定することに繋がるから
- ⑧ その他( )

医師と看護師の中間の職種を作らず現行の保助看法のもとで、看護師の業務拡大をさせ、医師の負担を減らす手法も考えられています。昨年、看護業務実態アンケート調査「看護師が行う医療行為の範囲に関する研究」が施行されています。この件についてご意見をお聞かせください。

問8. 看護師の業務拡大について

- ① 賛成
- ② 反対

- ③どちらともいえない
- ④その他( )

問9. 看護師の業務に関するアンケート調査そのものに対する先生のお考えをお聞かせください。

- ①賛成
- ②反対
- ③どちらでもよい
- ④その他( )

問10. 看護師の業務に関するアンケート調査に反対された先生にお聞きします。反対の理由をお答えください。

- ①医師と看護師の中間職種の創設に繋がるから
- ②看護師の業務拡大には反対だから
- ③現在、保助看法で定められた以上の仕事をさせているから
- ④看護師の階層化につながるから
- ⑤その他( )

私たちは外科医の労働環境を改善するために外科周術期に特化した医師と看護師の中間の職種(NP, PA あるいは特定診療師)制度の導入を目指しています。これについて以下の設問にお答えください。当然医師のコントロールの下(包括的指示のもと)での業務になります。

問11. 手術の際に医師と看護師の中間の職種(NP, PA あるいは特定診療師)が助手を務めることについて

- ①無条件で賛成
- ②条件付で賛成(条件: )
- ③反対
- ④どちらともいえない
- ⑤その他( )

問12. 外科周術期に特化した医師と看護師の中間の職種(NP, PA あるいは特定診療師)に術前に手術の説明をさせることについて

- ①賛成
- ②条件付で賛成(条件: )
- ③反対
- ④どちらともいえない
- ⑤その他( )



問13. 外科周術期に特化した医師と看護師の中間の職種(NP, PA あるいは特定診療師)に手術後の経過を説明させることについて

- ①賛成
- ②条件付で賛成(条件: )
- ③反対
- ④どちらともいえない
- ⑤その他( )

問14. 外科周術期に特化した医師と看護師の中間の職種(NP, PA あるいは特定診療師)にプロトコールに従った術後管理(輸液の管理、薬剤の量調整等)をさせる

- ①賛成
- ②条件付で賛成(条件: )
- ③反対
- ④どちらともいえない
- ⑤その他( )

問15. 外科周術期に特化した医師と看護師の中間の職種( NP, PA あるいは特定診療師)が医師の指示の下、ドレーンやカテーテル類の抜去、簡単な縫合等の医療行為を行う

- ①賛成
- ②条件付で賛成(条件: )
- ③反対
- ④どちらともいえない
- ⑤その他( )

問16. 最後に先生ご自身のことについてご回答ください

- ① 医師会 A 会員である
- ② 医師会 B 会員である
- ③ その他( )

問17. 先生の現在のお仕事について

- ① 内科系開業医
- ② 外科系開業医
- ③ 内科系勤務医
- ④ 外科系勤務医
- ⑤ その他( )

問18. もう少し詳しく、先生のお立場をお答えください

- ①内科系診療所の院長(管理者)
- ②外科系診療所の院長(管理者)

- ③内科系病院の院長(管理者)
- ④外科系病院の院長(管理者)
- ⑤総合病院の院長(管理者)
- ⑥内科系勤務医
- ⑦外科系勤務医
- ⑧その他( )

問19. 年齢をご回答ください

- ① 40歳以下
- ② 41－50歳
- ③ 51－60歳
- ④ 61－70歳
- ⑤ 71歳以上

問20. その他、医療の分業化について先生のご意見をご教授いただければ幸甚です。  
( )

以上でございました。ご協力ありがとうございました。  
同封の返信用封筒にて 2週間以内にご返送をお願いいたします。

## 新しいチーム医療体制確立のためのメディカルスタッフの 現状と連携に関する包括的調査研究

分担研究者 前原正明 防衛医科大学校心臓血管外科

研究要旨 日本医療の再生のためには、医師と看護師の中間職種、非医師高度診療師・診療看護師・特定看護師の導入と他医療従事者との協働による新しいチーム医療推進、確立が必須である。今年平成22年度は、厚労省「チーム医療の推進に関する検討会」が提唱している「特定看護師創設」と並行しつつ、看護師業務実態・意識調査実施し、かつ英国における非医師高度診療師・中間職種（PA：Physician assistant）の導入状況を視察し参考とした。その結果、「特定看護師」創設、日本版NP/PA導入（とくに周術期急性期管理を担うPAを含む）に向けて行程が描けてきた。

### A. 研究目的

新しいチーム医療の重要な担い手である「特定看護師」・NP/PAを導入するために、その工程表を作成し、国民の理解を得て、早急に実現する。

### B. 研究方法

「看護師業務実態・意識調査」の結果を分析検討した。最近PAを導入した英国における非医師高度診療師（PA）の教育、現状を視察し、国際PA教育者学会に参加し、調査検討した。

（倫理面への配慮）

特になし

### C. 研究結果

医師と看護師の中間職種、非医師高度診療師・診療看護師・特定看護師の導入、早期実現が必要であり、その可能性、実現行程が明らかとなってきた。

### D. 考察

「特定看護師創設」においては、まず急性期、と慢性期特定看護師を創設し、法制化の後に、日

本版NP/PA導入実現をはかるのが良策と考

えられる。

### E. 結論

新しいチーム医療体制確立のためには、医師と看護師の中間職種、非医師高度診療師・診療看護師・特定看護師の導入が肝要である。その工程表は明確化されつつある。

### F. 健康危険情報

特になし

### G. 研究発表

#### 1. 論文発表

①前原正明、西田 博、渡邊 孝、富永隆治、田林暁一：外科領域におけるコメディカルとの役割分担—現況と未来 2. 医師の立場から. 日本外科学会雑誌 111(4) : 209-215, 2010.

②西田 博、里見 進、遠藤久夫、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、伊藤雅治、宮崎 勝、金子公一、白井良夫、土屋了介、

永野浩昭、星野 健、矢永勝彦：外科医療におけるコメディカル診療参加の意義に関する考察—日本外科学会外科医週間タイムスタディによる外科医業務解析結果から—。日本外科学会雑誌 111(4)：251-257, 2010.

③田林暁一、西田 博、前原正明、富永隆治：病院における外科の課題。日本外科学会雑誌 111(5)：320-322, 2010.

④田林暁一、門間典子、西田 博、前原正明、富永隆治：周術期管理における看護師の業務拡大に関する意識調査。日本外科学会雑誌 111(6)384-386, 2010

⑤西田 博、田林暁一、富永隆治、前原正明、渡邊 孝、遠藤雅人：英国における PA 教育の視察と国際 PA 教育者学会に参加して—非医師診療師・中間職種教育のあり方を考える—。日本外科学会雑誌 112(1)：47-54, 2011

⑥兼松隆之、田林暁一、富永隆治、西田 博、伊藤雅治、前原正明、遠藤久夫：看護師の業務拡大に対する外科専門医を目指す若手外科医の意識調査。日本外科学会雑誌 112:2011 に掲載予定

## 2. 学会発表

①西田 博、田林暁一、兼松隆之、富永隆治、前原正明、遠藤久夫、伊藤雅治：チーム医療

維新：米国型 NP/PA から “Japan Original” へ。第 110 回日本外科学会、名古屋、2010 年 4 月 10 日.

②富永隆治、島本光臣、西田 博、前原正明、田林暁一：若い胸部外科医の労働時間・環境に関する提言。第 63 回日本胸部外科学会定期学術集会、大阪、2010 年 10 月 25 日.

③西田 博、田林暁一、富永隆治、前原正明、渡邊 孝、遠藤雅人：“自律自助”：新戦力“周術期管理師”の導入実現に向けて。第 63 回日本胸部外科学会定期学術集会、大阪、2010 年 10 月 25 日.

④西田 博、前原正明、富永隆治、渡邊 孝、田林暁一：“特定看護師”モデル事業実施へ—職能・職域の見直しを伴うチーム医療推進が病院医療に与えるインパクト チーム医療維新 全体最適に向けて“半歩前進”から“1 歩前進”へ—日本医療・病院管理学会第 285 回例会、東京、2010 年.

⑤前原正明：「中間職種高度診療師と外科診療」外科臨床現場におけるチーム医療実現のためのパネル：第 72 回日本臨床外科学会総会、横浜、11 月 23 日、2010

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）  
特になし